

### 現地研究の記録 : 1. 諏訪・伊那現地研究

小林, 慈信 / 龜山, 良吉

---

(出版者 / Publisher)

法政大学地理学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

JOURNAL of THE GEOGRAPHICAL SOCIETY OF HOSEI UNIVERSITY / 法政地理

(巻 / Volume)

8

(開始ページ / Start Page)

77

(終了ページ / End Page)

77

(発行年 / Year)

1967-03-21

## 現 地 研 究 の 記 録

### 1. 諏訪・伊那現地研究

指導 市瀬由自講師

木の葉が色づき、はや霜降りし晩秋の11月10日から12日に現地研究が行なわれた。先ず1日目には、上諏訪背後の展望台より諏訪湖周辺の地形を概観し、明日調査する伊那盆地を流れる天竜川、その源となる諏訪湖の成因、天竜川の流路変遷並びに赤石山地の山頂小起伏面、断層崖の説明がおこなわれ、我々参加者は地形図に目をやり、諒図し、現地の地形とみくらべた。

展望台での説明後、上諏訪に戻る。昔から交通の要衝として栄え、その後、製糸業の中心から精密機械工業の都市へと変遷し、今日松本市と共に新産業都市に選ばれた諏訪地区の中心である。諏訪を後にし、今回の現地研究の主目的である伊那谷に発達する段丘の面区分調査の為、一路伊那に向かつて出発する。

晴天に恵まれた2日目、飯田線飯島の宿を出た全員は、日影坂付近で下位面と下部ローム層の観察をやつた。そして上位段丘の模式地に向かう途中、南駒ヶ岳のカールと近辺の地形を眺め、洪積世氷期と中央アルプスなどの高山に見られる水蝕地形や大規模な土石流地形に興味を覚えた。

5万分之一飯田図幅「原」付近では上位段丘を観察し、上部、中部、下部ロームの一部を見ることができた。火山噴出物を中心として行なわれる堆積物や段丘面の対比、編年はテフロクロロジーと云われている。火山噴出物が地形面对比の指標となり、古い段丘面ほど火山灰の層の枚数が多く、新しいもの程それが少ないという規則性があることを学んだ。この方法は、段丘面の連続性、開拓状態、比高などと合わせて対比や編年を行ない、その形成過程を明瞭にして、段丘の成因を知る上には役立つものである。

高遠原駅付近「七久保」の粘土採掘場では断層破碎帯の露頭を見、伊那盆地が木曾山地と断層線によつて境されている地溝状盆地であるという一端を知つた。

3日目、先日は段丘堆積物である火山噴出物と各地形面との関係を見てきたが、今日はその一つである段丘礫層と基盤との関係を見て、伊那上郷には古生層起源の珪岩、硬砂岩などからなる伊那層とその上に不整合にのる天竜礫層を、又、高松段下の中島付近にて基盤をなす伊那層とその上にのる天竜礫層とを見ることができた。この現地研究によつて、伊那盆地に発達する河岸段丘はテフラとの関係から大別すると、3段に区分されることが確認できた。このような火山噴出物による地形面の対比、編年という方法は、日本のような火山国における地形研究にとつて重要であることを知り得た。

3年 壺山良吉

小林慈信